

「旧約の信仰者たちの手本」 エリヤ② (11:32~34)

これ以上、何を言いたいでしょうか。もし、ギデオンとバラク、サムソンとエフタ、また、ダビデとサムエルと預言者たちについても話すならば、時がたりないでしょう。彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行い、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。

■はじめに

1. 手紙の背景と執筆目的

- (1) ヘブル人への手紙を書いた著者、そしてこの手紙を受け取った読者も、直接イエスを見聞きしたことはない第2世代のユダヤ人信者である。
- (2) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃と推定される。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。
- (3) 一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。注意：警告は、エルサレム崩壊に巻き込まれて肉体の死を招くということであって、霊的な救いを失うことではない。

2. 手紙の内容と11章

- (1) ユダヤ教の三本柱は、「天使」、「モーセ」、「レビ族アロンの家系の祭司による祭儀」である。著者は、手紙の前半で、神の御子であるメシアは、天使にも、モーセにも、そしてアロンにも優ることを教える。
- (2) 手紙の後半は、前半の教えに基づき、信者はどのように歩むべきかを説明する。その中で、11章は、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという部分である。
- (3) 11章32~34節は、試練の中で信仰による勇気を発揮した先輩たちである。時期としては、士師の時代からイスラエル王国の時代である。
 - ① 士師記の時代前期から二人の士師、ギデオンとバラク（時期的にはバラクが先）
 - ② 士師記の時代後期から二人の士師、サムソンとエフタ（時期的にはエフタが先）
 - ③ 士師記の時代の後、王ダビデと最後の士師であり預言者であるサムエル
 - 時期的には、サムエルが先。サムエルは、士師の時代から王国の時代へと移る過渡期を担った。ダビデはサムエルによって油を注がれ、王となった。

④ 「預言者たち」は原文では、「またダビデとサムエルと預言者たち」とあり、サムエルの後に続いた王国時代の預言者たちを指している。

- (4) 34節「剣の刃をのがれた」に該当する王国時代の預言者たちとは、エリヤとエリシャである。前回は、エリヤの1回目として、「登場前の時代背景」を見た。

3. 前回の要点

- (1) ダビデ王の後継者となったソロモン王の治世は40年間（BC970~930）

- ① 治世4年目に、神殿建設着工。7年間で完成。
- ② 神殿の次に、王宮を建設。完成までに13年間。

建設事業の23年

- ③ **繁栄と背教の17年** 外国人の妻たちのために偶像礼拝を認めた。
- (2) ソロモン王の背教のために、主は内外に敵対者を起こした。ソロモンの死後、王国は北と南に分裂。
- (3) 北王国イスラエルの初代の王ヤロブアムと「ヤロブアムの道」
- ① ヤロブアムは、主が起こした敵対者のひとり。主によって10部族の王とされた。しかし、その後、彼は主のことばに従わなかった。
- ② ヤロブアムは、民がエルサレム神殿に行かないように、北端の町ダンと南端の町ベテルに金の子牛像を設置し、町々の高き所に宮を建て、レビ族でない祭司を任命し、自分勝手に8月15日を祭りとした。民がこの子牛像を拝むようになり、外国の偶像崇拜も受け入れる下地となった。「ヤロブアムの道」
- (4) ひとりの神の人(無名の預言者)が南王国ユダからベテルにやって来て、ヤロブアムが造った祭壇に向かって預言した。彼は預言者仲間にだまされて主の命令に背いたために、ユダに生還できずにベテルに葬られることになる。その出来事は石碑に記されて後世に伝えられた。
- (5) 背教の時代になると、預言者は命がけで活動しなければならない。ここには、「預言者の心得」を見出すことができる。エリヤやエリシャが登場する前に、主が備えてくださったと考えられる。
- ① 預言を語ると、それを聴いた権力者が預言者を脅すことがある(Ⅰ列13:4)
- ② 権力者が主のしるしを見て預言者にとりなしの祈りを求めることがある。そのときは、主に願ってあげなさい(Ⅰ列13:5~6)
- ③ 権力者が預言者を自分の側につけようとして、食事に招くとか、贈り物をしようとするがある。それに応じてはならない(Ⅰ列13:7~9)
- ④ 神からいったん自分が受けた命令は、それを変更するのも、直接、神からそのように言われたときのみである。同じ預言者仲間だからといって、人から聞いたことばに従って変更してはならない(Ⅰ列13:18, 21)
4. 本日のアウトライン
- (1) 北王国イスラエルの歴史
- (2) 預言者エリヤの活動と携挙
- (3) 預言者エリヤの「信仰による勇気の発揮」
- (4) 預言者エリヤのその後の使命

■北王国イスラエルの歴史(BC930~723)

1. 北王国の特徴：**王朝の交替**
- (1) 繰り返される謀反(私的な謀反だけでなく、主に油注がれての謀反もある)
- (2) 最後は、アッシリヤによって首都サマリヤ陥落。民はアッシリヤに強制移住。
2. **各王朝**の概観(預言者エリヤとエリシャの活動時期を、左横に縦の線で示す)
- (1) 北王国の初代の王は、エフライム族の**ヤロブアム**。その王朝は2代目で終わる
- ① ヤロブアムの治世は22年(Ⅰ列12:25~14:20)「ヤロブアムの道」
- 預言者アヒヤによるヤロブアムへの預言(Ⅰ列14:1~18):ヤロブアム王朝の断絶、そして北王国の滅亡・民の離散について、預言されていた。

- ② ヤロブアムの子ナダブ、その治世は2年。ペリシテ人の町を包囲している陣中で、イッサカル族のバシヤによる謀反が起きる。(I列15:25~31)
- (2) バシヤ王朝もまた2代目で、謀反によって倒れた
- ① バシヤの治世は24年、預言者エフーによる預言(I列15:33~16:6)
- ② バシヤの子エラの治世は2年、戦車隊長のジムリが謀反(I列16:7~14)
- (3) 4年間の混乱
- ① ジムリの天下はわずか7日間、將軍オムリに攻められ自殺(I列16:15~20)
- ② 將軍オムリ派とティブニ派の間で権力争い、4年間。ティブニが死んで、オムリが王となる。(I列16:15、21~22、23)
- (4) オムリ王朝(I列16:23~II列10:30) BC885~841
- ① オムリの治世は12年、治世7年目に首都をティルツアからサマリヤに遷す(I列16:23~28)。
- ② オムリの子アハブ、その治世は22年、シドン人の王エテバアルの娘イゼベルを妻にめとる。サマリヤにバアルの宮を建て、バアルのために祭壇を築いた。また、アシェラ像も造った。(I列16:29~33)
- ③ アハブの子アハズヤ、その治世は2年。サマリヤにある彼の屋上の部屋の欄干から落ちて病気になり、子のないまま死亡。(I列22:51~II列1:17)
- ④ アハブの子ヨラム、その治世は12年(II列1:17、3:1~3)。
- エリシヤが遣わした預言者により、将校のひとりエフーが油を注がれる。将校たちはそれを聞いて、エフーを王とすることに賛同(II列9:1~13)。
 - エフーは、イズレエルにいたヨラムとイゼベルを殺した。さらにサマリヤに手紙を送ってアハブの他の子たち70人を、殺させた(9:14~10:11)。
←エリヤによるアハブへの預言(I列21:17~29)の成就
 - その後、エフーは自らサマリヤに行き、「バアルのためにきよめの集会をする」と偽りの布告を發してバアルの預言者・祭司・信者すべてを集め、彼らを皆殺しにし、バアルの宮を破壊した(10:15~28)
- (5) エフー王朝(II列10:29~15:12) BC841~753
- ① エフーの治世は28年(II列10:29~36)
- 主がエフーに告げられたことは「あなたの子孫は四代までイスラエルの王座に着く」(II列10:30)
- ② エフーの子エホアハズ、その治世は17年(II列13:1~9)
- ③ エホアハズの子ヨアシュ、その治世は16年(II列13:10~25)
- 病床のエリシヤを見舞い、彼の上に泣き伏して「わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち」と叫んだ(II列13:14)
 - アブラハム契約のゆえに、イスラエルの民は全滅しない(II列13:23)
 - ユダの王アマツヤからの宣戦を受けて勝利(II列14:8~16)
- ④ ヨアシュの子ヤロブアムII、その治世は41年(II列14:23~29)
- エホアハズからヤロブアムIIまでの統治期間は、単純合計では17+16+41=74年。実際は、BC813~753=60年。共同王の時期がある。
 - エホアハズ(BC813~796)とヨアシュ(BC798~782)→3年間

エリヤ

エリシヤ

➤ ヨアシュ (BC798~782) とヤロブアム II (BC792~753) →11年間

- ⑤ ヤロブアムの子ゼカリヤ、6か月。シャルムの謀反により、殺される。かつて主がエフーに告げられたことば「あなたの子孫は四代までイスラエルの王座に着く」のとおりとなる。(Ⅱ列 15:8~12)

(6) 末期

- ① シャルム、1か月 (Ⅱ列 15:13~15)。メナヘムに殺される。BC752

- ② メナヘム、10年 (Ⅱ列 15:16~22) BC752~742

- ③ メナヘムの子ペカフヤ、2年 (Ⅱ列 15:26)。侍従ペカの謀反により殺される。

- ④ ペカ、20年 (Ⅱ列 15:27~31)。ホセアの謀反により殺される。

- 20年 BC751~731 → メナヘムはヨルダン川西側サマリヤにて王として統治、ペカは「侍従」とあるが、実質はヨルダン川東側ギルアデにて強大な勢力を持っていたと推定される。ペカがサマリヤも掌握するのは、メナヘムの子ペカフヤを倒した BC740頃。

- 治世 17年目 (BC735)、アラムの王レツィンと組んで、南王国ユダを攻撃 (Ⅱ列 16:1~9)。目標はユダの王家を倒し、傀儡政権を樹立すること (イザヤ 7:6)。これは「ダビデ契約に対する攻撃」、アラムも北王国イスラエルも主に対して越えてはならない一線を越えた。その結果、両国ともアッシリヤに滅ぼされることになる (イザヤ 7:15~17、Ⅱ列 16:9)。

- 第1次アッシリヤ捕囚 (Ⅱ列 15:29) →ホセアの謀反 (15:30)

- ⑤ ホセア、9年 (Ⅱ列 17:1~6)。サマリヤ陥落、アッシリヤ捕囚。BC723

(7) 北王国イスラエルの滅亡の原因 (Ⅱ列 17:7~41)

■ 預言者エリヤの活動と携挙

1. エリヤの登場、しかし、すぐに身を隠す (Ⅰ列 17:1~24)

(1) アハブ王に対する預言 (1節)

- ① 「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる」・・・Ⅰ列 16:31~33によると、アハブ王はサマリヤにバアルの宮を建て、バアルのための祭壇を築いた。またアシェラ像も造った。これらの自分で動けない偶像に対して、イスラエルの神は真の生ける神であるという宣言。

- バアル: 農作物の豊穰をもたらす神。雨と霧と露を支配する天候の神ハダデの呼称でもある。その妻は、愛と戦争の女神アナテ (または、アシュタロテ)。バアルのすみかは遠い山の上で、天と地が合一する世界の果て。彼は自然を支配する神として、祝福と破壊を与える。右手に棒、左手にいなずまを持つ姿で描かれる。

- アシェラ: アシュタロテと共に、豊穰を求める祭儀で礼拝の対象とされる女神。相手となる男神はバアル。その祭りは官能的で性的傾向が強く、「神殿男娼」「神殿娼婦」の温床になっていく。

- ② 「私のことばによらなければ、ここ、二、三年の間は露も雨も降らないであろう」・・・エリヤ個人のことばではなく、預言者として受けた主のことば

(2) 彼に次のような主のことばがあった。・・・それで、彼は主のことばのとおりにした

- ① ヨルダン川の東、ケリテ川のほとりに身を隠す。烏が彼を養う (17:2~7)

- ② シドンのツアレファテに行って住む。やもめが彼を養う (17:8~16)
- (3) やもめの息子が病死したが、エリヤの祈りにより、よみがえる (17:17~24)
2. エリヤが身を隠した背景 (1列 18:3, 4, 10)
- (1) 王妃イゼベルは、主の預言者たちを殺害した。
- (2) 王宮に仕えるオバデヤは、3節「主を恐れる人」(真の信者)であった。
- (3) オバデヤは、100人の預言者を救い出し、50人ずつほら穴の中にかくまい、パンと水で彼らを養っていた。
- (4) アハブ王は、エリヤを捜索し、周辺諸国・諸民族のすべてに人を送った (10節)。
3. 干ばつになって3年目、サマリヤではひどい飢饉に悩んでいた (1列 18:1~16)
- (1) アハブ王とオバデヤは手分けして、家畜に与える草を求めて、国を巡り歩いた。
- (2) 主がエリヤに、「アハブに会いに行け。わたしはこの地に雨を降らせよう」
- (3) エリヤは、オバデヤに会いに行き、「エリヤがここにいると、あなたの主人に言いなさい」と告げる。オバデヤは、自分の真の主人はアハブではなく、主であること、主の預言者100人をかくまって養っていることを告げる。
- (4) アハブ王がオバデヤの報告を受けて、エリヤに会いに来る。
4. カルメル山での対決 (1列 18:17~46)
- (1) アハブ王は、エリヤを「イスラエルを煩わすもの」と非難する。エリヤは「あなたとあなたの父の家こそそうです。現にあなたは主の命令を捨て、あなたはバアルのあとについています」と反論する。
- (2) カルメル山に、イゼベルが抱える450人のバアルの預言者、400人のアシェラの預言者、そしてイスラエルの民を集める。エリヤはバアルの預言者450人と対決する。「火をもって答える神、その方が神である」
- (3) 36節 エリヤの祈り「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ」・・・アブラハム契約の神の名を呼んだ・・・「あなたがイスラエルにおいて神であり、私があるあなたのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行ったということが、きょう、明らかになりますように。」
- (4) 38節 主の火が降って来た
- (5) 40節 エリヤの命令により、民はバアルの預言者を全員捕らえて、山から降ろし、キシオン川のほとりで殺した。
5. **エリヤはイゼベルの脅しを恐れて、神の山ホレブへ (1列 19:1~18)**
- (1) イズレエル→ユダのベエル・シェバ→荒野へ一日の道のり (えにしだの木の陰)
- (2) 5~8節 主の使いが現れて、パン菓子と水を食べさせる (2回) →ホレブへ
- (3) 9~10節 「ただ私だけが残りました。」
- (4) 11~13節 大風・地震・火、それらの中には主はおられなかった。火のあとに、かすかな細い声があった。エリヤはこれを聞くと、すぐに外套で顔をおおい (主の臨在にふれたときの反応)
- (5) 13~14節 「ただ私だけが残りました。」
- (6) 15~17節 ハザエルをアラムの王に、エフーをイスラエルの王に、エリシャをエリヤに代わる預言者にする。彼ら3者が行くところには、剣と死が伴う。
- (7) 18節 イスラエルの中に七千人を残しておく=イスラエルの残れる者レムナント

6. アラムの王ベン・ハダデとイスラエルの戦い (I 列 20 章)
7. イズレエル人ナボテのぶどう畑事件、エリヤの預言、アハブのへりくだり (I 列 21 章)
8. アラムとの戦いが無い期間が 3 年経過したとき、ユダの王ヨシャパテからの提案で、ラモテ・ギルアデをアラムから奪還しようということになる。アハブ王は 400 人の預言者を召し集めた。預言者ミカヤは、400 人の預言者すべての口に「偽りを言う霊」が授けられたと語る。(I 列 22：1～29)
9. アハブは、ラモテ・ギルアデの戦場で重傷を負い、戦車の中で死んで、サマリヤに着いた。7. でのエリヤの預言のとおりとなり、犬が彼の血をなめた (I 列 22：29～38)
10. アハブの子アハズヤの病気とエリヤの預言、天から火が下るしるしが伴う (II 列 1 章)
11. エリヤの携挙 (II 列 2：1～18)

■預言者エリヤの「信仰による勇氣の發揮」

1. エリヤは、権力者や軍隊に対して、臆することなく預言を語った。また、カルメル山ではバアルの預言者 450 人と対決して勝利した。しかし、他方で、身を隠せと言われれば、隠れる。鳥や異邦人のやもめに養ってもらえと言われるなら、甘んじてそれを受け。→ 信仰による勇氣とは、自分の判断や自分の気持ちで行動するのではなく、ただひたすら主のことばに従うところにおいて發揮されるものである。
2. エリヤの人間の本質は、弱い。そして不安に駆られやすい。イゼベルの脅しに屈して、イズレエルから南のベエル・シェバにまで逃げ、さらに荒野へ一日の道のりを入れて、えにしだの木の陰で死を願ったのである。「自分だけが残った。誰も味方はいない」と言って絶望していた。しかし、ここから、エリヤの信仰を成長させた主の導きが始まる。
3. 主の導きは 3 つの段階を経る。
 - (1) パン菓子と水を与え、睡眠させる。これにより、肉体が元気になる。
 - (2) 神の山ホレブに行かせる。神との交わりの中で靈的覺醒を与える。
 - (3) 人の目を引くような激しい、あるいは華々しい働きの中には主はおられない。かすかな細い声、そこに主が臨在されることを教える。
 どんなに人々が背教に走ったとしても、主はいつもイスラエルの残れる者、真の信仰者たちを残しておられる。彼らは目立たない、かすかな細い声である。しかし、そこに主がおられる。主がともにおられる。

■預言者エリヤのその後の使命

1. メシアの初臨において現れて、イエスと話し合う (ルカ 9：30～31) 輪読 9：18～36
 - (1) ルカ 9：31 「ご最期」・・・「死」ではなく、「出発」「解放」
 - (2) ルカ 9：27 「神の国を見る」の成就・・・モーセ・エリヤ・弟子たちとイエス
 - (3) ルカ 9：35 神の声 (バット・コル) 3 回のうちの 2 回目 (3：22、ヨハ 12：28)
2. 主の大いなる恐ろしい日 (大患難期) が来る前に、イスラエル民族に遣わされる。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。(マラキ 4：5～6)
 - (1) イスラエル民族の救いのための備え＝父子関係の回復
 - ① 家族関係が壊れた根本原因は、メシア拒否 (マタ 10：21～22、34～37)
 - ② よってエリヤの活動の中心は、イエスをメシアであると証言すること
 - (2) 大患難期の前半、14 万 4 千人のユダヤ人が世界宣教 (黙 7：3～8、マタ 24：14、黙 14：1～5)。同時にこの時期、エルサレムでは二人の証人が立つ (黙 11：3～13)